の気持ちが強く働き、第一次南極地域観測隊から参加しました。南極の調査で最初にやりたかった事は、昔から大気の中の0.03%と決まっていたCO_2二酸化炭素の量がどうなっているのか、今のような観測機器も無い中、毎日南極海の観測調査をやりました。人のやらない事を実行する、これは五中の「創作」の精神だと思います。好奇心を持つ大切さ、それも五中の校風に育てられたものだと思っています。後年、ドライバレー地域という無氷雪地域で、新鉱物 「南極石（なんきょくせき）」を発見しました。南極大陸第1号の新鉱物で、まだ第2号は見つかっていません。

1970年からは、マクマード基地近くの無氷雪地帯の塩湖の成因追求、DVDPプロジェクトをアメリカ、ニュージーランド、日本で行いました。これも五中の開拓精神ですね。

台湾の暖かい所で育った私が、寒い南極に28回も行くことになったのは、ひとえに五中から八高、八高での五中の先輩からの誘いでサッカーから山岳部へ進んでいった事がすべての原因で、その意味で私の全ての原点は五中にあると思うのです。

次々と出てくるエピソードにあっという間の時間でした。昨今の地球温暖化についてもお聞きしました。そこで、ご自身も50年前からのご研究の課題であった事、永久凍土が溶けることでメタンハイドレードから大気に排出されているメタンガスも大きな問題で、色々な要因か絡んでいるから、大所高所に立って判断する必要があると教えて頂きました。

五中は自由でいい学校だった、と何度もおっしゃる鳥居さんに、変わらずに続く「校風」の妙を感じました。伊藤長七先生の創立の志は、確実に時代を経て受け継がれている。

南極極地研究の第一人者として、ご健康に留意され、ますますご活躍されます事を。

初対面の私どもに、後輩だからと丁重に対応して下さいました、鳥居さん、奥様、本当にありがとうございました。

（広報部会　楠見充男 025 A・岩瀬惠子 025 I）

（2008/4/13）

「一番自由だったし熱い時間だった」

王子菜摘子さん（052 B）インタビュー

2008年3月30日　俳優座劇場にて舞台衣装の王子さんと

五中24回A組のいずみたく（今泉隆雄）さん創立の「フォーリーズ」という劇団でミュージカル俳優として活躍中の052 B王子菜摘子さん。本年10月19日に開催される「五中・小石川創立90周年祝賀会」で実行委員会が披露する「音楽でつづる小石川－組曲小石川」の案内役も引き受けて下さいました。小石川高校から音楽大学へ、小石川高校では比較的異色の進路をとられた王子さんへ、同じ大学へ進んだ90周年実行委員022 A長野冨貴子さんにインタビューをお願いしました。

長野：先日は舞台を見せて頂きました。はじけるような王子さんの演技と表現に、思わず涙ぐむ感動を頂きました。ミュージカルは昔からの目標だったのですか？

王子：子どもの頃から憧れを持っていました。宝塚が大好きで、宝塚にチャレンジするのには都立の普通科がいいかなと思って。中学1年の時、小石川高校の創作展を見に来て、この学校に入りたい、演劇の盛んなこの高校に入りたいと強く思いました。その時演劇に出演していらした先輩への憧れもありましたね。（笑）

（注）創作展は近年、クラス単位で「演劇」を発表することが多くなってきました。数年前まで、3学年AからHまで全クラス24の演劇公演が企画され、投票によって「創作展大賞」が決まりました。大賞受賞に向け各クラスが凌ぎをけずり、学年が上がるごとに、演劇内容も表現も充実したものになります。

長野：それでは、小石川高校の創作展での経験は、大きな後押しになったのかしら？

王子：はい、演劇に関わらずですが、脚本から始めてクラスで一から作り上げていくあのエネルギーを経験できたのは、すばらしいまたとない経験でした。行事週間を頑張れる人が大学受験にも頑張れるみたいな気概もあって、皆で熱く燃えましたね。あの時の、若いが故の熱さ、その時代があったからこそ、今があるという思いがあります。

長野：人生の中でたったの3年間ですが、歳を重ねるごとに、この小石川高校で過ごした3年間は、どの時期にも換え難い濃密な3年間だという思いが強くなります。まだ若い王子さんですが、あなたにとって小石川で過ごした時間はいかがでしたか？

王子：私にとって、一番自由だったし、熱い生活でした。宝塚の受験の準備をするつもりが、剣道部へ入部したら剣道も楽しくて、宝塚受験はやめました。でも夢中にな

った剣道は舞台での立振舞いにも生きているような気がします。たまたま高校時代に商業ミュージカルに出演する機会があり、その時に何か１つ自分の出来るものが必要だと感じて、音大の声楽科受験を決めました。高３からは選択授業が多かったので、ほとんど音大受験のために過ごしました。音大の受験ってやることが多いんですよね。

長野：そうね。私は学校群の第一期生、入学して気分転換のハイキングのつもりでワンゲルに入部しましたが、音大の受験のための勉強をする事が多くて諦めました。毎日３〜4時間のピアノの練習、その他にソルフェージュ、楽典、声楽etc．私達の時は三年までびっしりとカリキュラムが組まれて数Ⅲや物理までやらなくてはならなかったので、毎日が何しろ忙しくて眠くて、ゆっくり高校時代を楽しんだ思いがないです。

王子：ピアノ科の練習量は大変ですよね。

長野：そうなんです。ピアノ科は職人的な分野なので、本当に時間が足りなかった。そんな忙しさの中だから、この学校の持つ「自由」で「自立」した空気というのは、本当に貴重で素晴らしいものでした。

この度は、創立90週年実行委員会の企画に協力下さってありがとうございます。
お忙しい地方公演の中、わざわざ出演を決めてくれたと聞いていますが、その思いは？

王子：90周年実行委員の皆さんとお会いして、大先輩なのですが、まぎれもなく小石川生であるという雰囲気を感じて不思議でした。私自身の高校時代がとても良い時間でしたので、そのノリで何か手伝える事があるならと強く思いました。

長野：ありがとうございます。それこそ私達実行委員会も一から練り上げて３年、素晴らしいものを作っていきましょう。今回の周年行事は私達卒業生の「創作展」かもしれませんね。今後の抱負は？

王子：自分のやっている仕事で、たくさんの人がたくさんたくさん喜んでくれれば嬉しい。毎日毎日精一杯やっていくだけでも、奥が深くてまだまだです。

長野：そうね、何しろやればやる程、これでいいと云う事がない世界ですから、その楽しさはよく判ります。それでは最後に小石川の後輩たちに一言を。

王子：未来の事を考える事は大切ですが、今一番やりたい事を一所懸命にやってみる事が大切だと思います。毎日を頑張って取り組んでいって欲しいと思います。

忙しい公演の練習の中を割いてのインタビューでした。自分の夢をかなえ、希望の仕事に打ち込む王子さんの今後のご活躍を、応援していきたいと思います。ありがとうございました。　（長野冨貴子022 A）

（2008/6/14）

今、中等教育学校は

中等教育学校３年目の夏に

東京都立小石川中等教育学校
主幹教諭　稲井　達也

1 あと３年で中高一貫が完成　今の小石川

開校から３年目となり、１期生は今春３年生になった。早くも道半ばにさしかかろうとしている。

本校は単に高校の３年間に中学校の３年間を足した６年間ではない。中学校教育と高校教育を接続することにより、６年間を見通した教育が実現可能になった。

生徒自治会は中高が一緒になって活動している。立候補者の立会演説会は、中央委員に立候補した中１の生徒から会長に立候補した高校２年までが揃う。各種委員会は昼休みに行われ、中等生も活発に議論に参加している。部活動は、部の実態によっては、中高一緒に活動している部もあれば、別々に活動している部もある。

９月の行事週間もまた中高一緒に行っている。創作展では高校生は全てのクラスが演劇を行っているが、今年私の学年は４クラスとも演劇に決定した。体育祭も一緒に行っており、昨年から、中等生全員による組体操を実施している。体育科の教員が１学期から授業を通して指導している。芸能祭は、出場するための予選の厳しさを実感しているようである。

中等３年が６年になる時、中高一貫校が完成する。単に高校教育に中学校教育を足しただけではないということの意味を真剣に問うとき、特に前期課程３年間での生活指導が大切であると考えている。基本的な生活習慣や礼儀など、人としての基本をしっかり定着させなくてはならない。学習と生活は一体のものである。ある意味、先手の生活指導が求められている。

2 理学教育から理科教育へ

小石川高校が伝統的に培ってきた理学教育を充実発展させていくことも本校に課させられた使命の一つである。理科離れが進み、技術立国としての将来が危ぶまれ、文部科学省はスーパー・サイエンス・ハイスクール事業を始め、高校が平成18年に研究指定校となった。「理科好き・数学好きを育てる教育課程の開発」を研究テーマとしているが、全国のスーパー・サイエンス・ハイスクールの中でも、カリキュラム開発を謳っているのは珍しい。このようなテーマを設定したのも、本事業を中等教育学校にも継続していくことを見通している。配当された予算を活用して、施設・設備の充実はもちろん、夏休みには中高生一緒に戸隠に自然観察に出かけたり、大学の研